

能登の創造的復興に向けて 工学系人材育成の重要性

北陸信越工学教育協会 会長
金沢大学 理工研究域
瀬戸 章文

令和6年能登半島地震は、尊い命と日常、そして地域が長年培ってきた産業・文化基盤に甚大な被害をもたらしました。一方で、この未曾有の困難は、地域の未来を単に「元に戻す復旧」ではなく、新たな価値を生み出す「創造的復興」へと転換する契機とも考えられています。金沢大学では、北陸に根差す総合大学として、人材の育成と研究活動を通じ、能登の創造的復興に向けた様々な取り組みを続けています。

その中心となるのが、2024年1月に設置された「能登里山里海未来創造センター」です。未来創造部門、ひとづくり部門、まち・なりわいづくり部門の3つの部門において、企画、教育、研究を進めています。金沢大学では、これまでも能登半島をフィールドとして、豊かな里山里海の自然を生かした多様な教育研究活動を展開してきました。例えば、金沢大学能登里山里海SDGsマイスタープログラムでは、2014年から珠洲市からの支援を受けて地域のリーダーとなる人材育成を行ってきました。能登半島地震後は、同プログラムにおいて能登の復興、および再活性化を担う次世代リーダー育成に取り組んでいます。

地震の直後は、医療チーム派遣や、地域住民の心のケア、災害ボランティアなどの活動が中心でしたが、今後の能登の創造的復興においては、工学系人材が果たす役割がますます重要となると考えられます。能登が直面する課題は多層的であり、日本全国、あるいは世界の地域が今後直面する問題の縮図とも言うことができます。工学に関係する課題として、人口減少社会に対応した地域システムの構築、高齢者にとって住みやすい街や住宅、若者を惹きつける地域の魅力、情報インフラの整備、エネルギーや水資源の安定確保、環境と調和した産業再生などが考えられ、いずれも高度な工学的知見と現場に根差した実践力をもつ人材育成が必要です。金沢大学では、こうした課題に応えるため、令和7年度から「防災・復興人材特別プログラム」を新設しました。理工学域地球社会基盤学類および専攻が中心となったプログラムでは、令和7年度に計71名（一部手続き中）の防災士を輩出しました。このプログラムでは、多様な自然災害のメカニズムや対応策・課題に関する基礎知識を学び、将来、被災地諸機関と協働して復旧・復興を推進するために必要なスキルを修得することを目標としています。

創造的復興を担う人材育成には、学生が地域課題を「自分ごと」として捉え、現場で考え、試行錯誤しながら解決策を構想・実装できる教育を推進することが重要です。この実現には、工学に関する専門知識に加え、様々なフィールドにおける実習や実践を通じて、課題設定力、対話力、社会実装力を養う必要があります。能登をフィールドとした教育は、学生にとって学びの深化だけでなく、地域への責任と共感を育む貴重な機会となるでしょう。

創造的復興の鍵は、技術だけではなく、地域の歴史や文化、暮らしへの深い理解と尊重が不可欠です。これには専門分野を超えて、人文社会系や医薬系との連携や、地域の多様なステークホルダーとの協働が必要です。画一的ではない、能登らしさを生かした復興モデル構築を目指して、新しいカタチの工学系人材育成が期待されます。